

# 大森山動物園、半世紀の歩み

8ページから19ページまでは「大森山動物園、半世紀の歩み」として、48年間動物園に在籍した者の見方になりますが、園の足跡とともに園の存在意義を高め、また、成長するうえで重要な役割を果たしてきたものをいくつかの項目に分け、できるだけ客観的にまとめてみました。

園長 小松 守

## 動物園づくり、50年の歩み



開園を待ちわびた人々にぎわう園内(右手前はアシカ舎、奥は入園ゲート)

大森山動物園は児童動物園を引き継ぎ、50年の時を刻んできました。この間の成長と動物園づくりの歩みを前半と後半に分けて概観してみます。

前半の25年は今の動物園のカタチをつくった時代でした。1973年9月1日に開園し、入園料は大人20円から100円、子どもは10円から30円と大幅に値上げしましたが、その年の11月23日までの入園者数は約12万6千人、翌年も約27万8千人の入園があり、市民の期待の大きさが分かります。

しかし、開園の盛り上がりは長続きせず、後の年間入園者数は20万人台前半で推移します。その理由の一つは展示内容の貧弱さにありました。展示動物は児童動物園から引き継いだものを含め93種類約280点で小型鳥類が多く、物足りなさがありました。その対応として、シマウマなど新しい動物を次々に導入し、1981年にサル山をオープン、翌年には中国蘭州市から寄贈されたフタコブラクダを展示するなど努力が続けられました。新規動物導入が一段落した開園10年を過ぎた頃には、入園者数が年間20万人を下回ることもありました。



1977年 シマウマ導入



1982年 フタコブラクダ来園

その後、市民からの要望もあり、秋田市は1989年3月、ゾウとキリンの導入を市制100周年記念事業の一つとしました。園南側の山を切り崩した約8,000㎡の土地造成や



1990年 アフリカゾウ来園

動物舎建設を進め、南アフリカ共和国からゾウ2頭を輸入するとともに多摩動物公園からキリンを3頭導入し1991年春に展示を始めました。動物園の歩みの中でとても大きな節目の事業でした。この年の入園者数は約35万人で50年間この記録は破られていません。また、事業費確保のため入園料を200円から400円に値上げし、動物園は特別会計を設定しました。

動物園づくりはさらに続き、人気の高かった動物ふれあいサービスの充実を図ろうと、1997年、園地を西側に約1ha拡大、レッサーパンダも仲間入りし「ふれあいランド」をオープンしました。大人料金を500円に改定した一方で、子ども入園料無料化がこの年から始まりました。この整備で現在の動物園のカタチがほぼ完成しました。



1997年 ふれあいランドオープンに合わせて仲間入りしたレッサーパンダ

1998年以降の後半25年はカタチの維持と再整備、前半に蒔いてきた種を育て発信力を高めながら多様なニーズに応えることで、動物園の存在意義を高めた時代ともいえます。



1995年 ユキヒョウ繁殖

飼育動物数も増え、蓄積した飼育経験や知見、飼育技術は希少種の繁殖につながり、全国的にも注目されました。飼育とともに展示の重要性を意識し、1999年には「飼育係」を「飼育展示担当」に名称を変更しました。

2002年は義足のキリン「たいよう」の物語が地方紙の年末10大ニュースのトップに選ばれるなど、市民の動物園に向けた意識が大きく変化した頃でした。動物園では「青空シンポジ

ウム」や「明日の動物園を考える会」などが開催され、生命と向き合う動物園とその役割に関心が集まり、マスコミも注目しました。

秋田市議会からは動物園の存在を明確にすべきではとの質問が出され、秋田市は2005年12月議会に「秋田市大森山動物園条例」の制定を提案し可決されました。都市公園条例の別表に記載される一有料施設から、動物園の設置理念をうたいあげ、その存在意義を明示した重要な出来事でした。設置理念にある重要な語句は、シンポジウムの中で子どもたちが読み上げた作文の文言を生かしています。

2006年の条例施行でこれまで冬の観察会として開催していた冬期開園が正式に「雪の動物園」となり、1993年から夏に開催していた「夜の動物園」とともに季節の大イベントに成長、四季を通じた動物園サービスが始まりました。同時に動物園の愛称も公募され、2007年の春開園時に愛称「ミルヴェ」を発表、また動物園は人と動物が心を交わす場であってほしいとの願いを込め、大森山動物園のテーマは「動物と語らう森」となり、現在も継続しています。熱心なスタッフのアイデアは様々な展示の工夫や教育活動、「まんまタイム」や動物解説、エサやり体験など大森山の特徴的な展示サービスへと発展しています。

2000年代は、開園から30年経過した各施設の老朽化も見え始め、再整備が進められた時でした。開園当初からあった鉄檻とコンクリートの総合動物舎は、解放的な「チンパンジーの森」や植栽も鮮やかな「王者の森」に建て替えられ、動物園のイメージは大きく変わりました。野生動物の絶滅が叫ばれる時代、人々の動物や動物園に向ける意識も変化してい



2002年 キリンのたいようと父ジュン



2003年 イヌワシの自然繁殖に成功



2003年 青空シンポジウム



2005年 こどもシンポジウム



冬の観察会(写真は2003年頃)



入園ゲートで雪だるまがお出迎え

た時代でした。2007年には研修ホールを備えた管理事務所「ミルヴェ館」、2008年には動物の健康管理のための「森のびょういん」、加えて2009年には宝くじ協会の支援で大型遊具「アソヴェの森」が登場するなど再整備が続きました。

2012年に市の受益者負担見直しで入園料は700円となりました。この影響か年間入園者数は25万人台に落ち込みましたが、2014年の入園ゲート・ビジターセンターの新築、2020年のサル舎「天空の楽猿」の完成などは、利便性向上にも効果的で、県人口が92万人を割る近年でも入園者数は27~28万人で推移し、2022年8月に開園以来の総入園者数は1,200万人を越えました。ただ、2016年の高病原性鳥インフルエンザの園内発生や2020年からの新型コロナウイルス感染症など、新たな危機を経験した後半でもありました。

動物園は50年間、着実な歩みで発展成長を遂げてきました。それを可能にしたのは、園を楽しむ入園者、支援してくれる多くの市民、魅力アップを図ってきた園スタッフ、それぞれが「動物園は大切な場だね」と思う気持ちの集結によるものに違いありません。



2002年 チンパンジーの森完成記念式典



完成当初のチンパンジーの森



2009年 アソヴェの森オープン



2011年 さるっこの森完成



2015年 入園者1,000万人達成(ビジターセンター大屋根下で)



2020年~ コロナ禍でも試行錯誤してイベントを続けてきました